

聖書箇所：創世記 49 章 8～12 節

説教題：やがて来られる方を待ち望む

1 ヤコブの遺言

今日から待降節第一週が始まります。「待降節」をひとことで説明するなら、イエス・キリストが私たちのところに下って来てくださることを待ち望む四週間ということなのです。旧約の時代に、イスラエルの人たちが、救い主の来られることを長い間待ち望んだことにちなんでいます。そこで今日から三回に分けて、旧約聖書を開き、主を待ち望んだイスラエルの人々の姿を見ていくことにします。

今日はその第一回目で創世記からヤコブを取り上げます。ヤコブは兄エサウとともに双子として生まれました。父親のイサクが年をとり、目が見えなくなったとき、ヤコブは兄になりすまし、長男の権利を横取りしてしまいます。後になって、このことを知った兄エサウは怒り、ヤコブを殺そうとします。ヤコブは命からがら家を飛び出し、伯父であるラバンのところに転がり込むのですが、そこで理不尽な扱いをされてしまいます。そんな生活に耐えながらも、ヤコブはラバンのふたりの娘を妻に迎え、12 人の子供をもうけます。後にこの息子たちの子孫が、それぞれイスラエルの十二部族に成長することになります。

そんな波瀾万丈の生涯を送ったヤコブは、死の間際にして十二人の息子たちを枕元に呼び寄せ、遺言を語ります。

2 ユダの子孫として来られ方

今日はその中から、四番目の息子であるユダに向けて語っているところを開いています。8 節。「ユダよ。兄弟たちはあなたをたたえ、あなたの手は敵のうなじの上であり、あなたの父の子らはあなたを伏し拝む。」

10 節。「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う。」

ユダについての詳しいことは創世記 38 章に書かれてはいますが、実は聖書のどこを探しても、ユダがイスラエルの王になったとか、他の国の人たちがやってきてユダに従ったということは出てきません。これはどういうことなのでしょう。ヤコブは年をとりすぎて、ありもしないことを妄想のように語ったということなのでしょう。もしそうなら、結局聖書は人間が考え出した単なる物語に過ぎず、信じることなどばかげたことになりません。

もちろん、そんなはずはありません。ではどう考えたらよいのでしょうか。ここはヤコブの息子のユダのことを語っていると思い込んだから、辻褄が合わなくなってしまったのです。もし、これが息子のユダのことではなく、ユダの子孫のことを指しているとするとは話は別になります。結論から言うと、これはユダの子孫として来られた救い主キリスト・イエスのことを語っています。

でもヤコブは紀元前二千年頃の人です。イエス・キリストが来られるのは、ヤコブの時代から数えると二千年も先のことです。そん

な遠い先のことを、まるで見てきたかのようにはっきりと語るなどのできのでしょうか。もちろん人間にはできません。神がヤコブを通して救いのご計画を語ってくださったこととなります。でも本当にそうなのでしょうか。

3 救い主の姿

その事を確かめていきます。

8 節から 10 節までを読むと、救い主がいかに力に満ちた方であって、高いところに座る方であるのかが書かれています。確かに救い主は神でありますから、そのとおりかもしれません。けれども、11 節の後半はどうでしょうか。「彼はその着物を、ぶどう酒で洗い、その衣をぶどうの血で洗う。」これは何のことでしょうか。これだけではわかりません。ここで理解の助けとなるのはイザヤ 63 章 3 節です。「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。」

「彼ら」とは神に逆らった者たちのことです。ですから、これはもう神のさばきそのものです。ヤコブが「その衣をぶどうの血で洗う」と言ったのは、神のさばきを受けて死んだ者たちの返り血を神ご自身が浴びられた。そのような意味になります。こんなことを言うと急に不安になった方もいるでしょう。しかし実はこれが私たちにとって大きな恵みのことばでもあることを知っていただきたい。

聖書には神に逆らう者は必ずさばきを受けると書かれています。けれども神は、この

さばきから私たちが救われる道を備えてくださっているとも書かれています。どのようにしてでしょうか。それが救い主です。救い主が来られ、この救い主が私たちの身代わりに罪のさばきを受けられる。神の足に踏まれて血を流さなければならなかったのは、本当なら私たちでした。しかし、救い主は私たちの身代わりとなってくださったとき、事情は一変します。神ご自身が血を流されるのです。救い主イエス・キリストは、十字架においてそのような姿をとられました。「その衣をぶどうの血で洗う。」もはや私たち罪人の血のことではありません。主ご自身の血です。ヤコブは確かに二千年後に来られる救い主の姿を語っていました。

4 救い主を待ち望み続ける

(1) 苦しみの中にあっても

このように救い主が来られると言われはしましたが、ヤコブの十二人の息子たち、そしてその子孫たちがたどっていった道は平坦なものでは決してありません。このあとまもなく、イスラエルには大飢饉に襲われます。人々はエジプトに難を逃れ、やがてそこで奴隷として苦しみを味わいます。モーセが遣わされ、エジプトを脱出することにはなりますが、四十年間、荒野をさまよわなければなりません。やがてイスラエルに戻っても、周りの国からいつも攻められ、苦しめられていきます。やがて国は分裂し、外国軍が攻めてきて、主だった人々は外国に強制移住させられるという辛酸をなめます。

危機が襲ってくるごとに人々は救い主がやって来て、自分たちを助けてくださるに違いないと熱心に待ち望みました。あるときはモーセが遣わされ、あるときは預言者が遣わ

されました。でも肝心の救い主は現れません。こんなとき、普通ならどうするでしょう。来るか来ないかわからない救い主に頼るよりも、もっと身近で願いをかなえてくれそうなほかの神々を拝みたくなるのではないですか。

でもユダヤ人は違いました。確かに彼らはいろいろな欠けはあります。

何度も罪を犯します。そのたびに神から厳しいさばきを受けました。それでも、彼らは救い主を待ち望み続けます。二千年間待ち続けます。

何か苦しいことが起きたり、大きな問題にぶつかって目の前が暗くなるようなとき、私たちはすぐに考えてしまいます。本当に救い主はおられるのだろうか。神は私のことを助けてくれるのだろうか。聖書のことばは本当なのだろうか。

そんなとき思い出していただきたいのです。信仰の大先輩たちはどんなことがあっても、救い主が来られることを信じ続けていった。彼らが特別にすぐれていたわけではありません。私たちの同じ、弱くて揺れ動かされてしまうような人たちです。それでも信じ続けることができた。

(2) 苦しみをともにされる救い主

なぜできたのでしょうか。同じイザヤ書63章9節にこうあります。「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いてこられた。」

神は、私たちが涙を流しているとき、いっしょに涙を流してきた。神は、私たちが誘惑にあっているとき、その誘惑をいっしょに受

けられてきた。そんなふうにして、ずっと神は私たちの苦しみをいっしょに味わってこられた。

救い主はどんな方ですか。まるでスーパーマンのように、すばらしい力で奇蹟を起こし、目の前の問題を一瞬のうちに解決するのか。

そうではありません。この方は強くなるのではなく、弱くなってくださいました。この方は血を流され、白い衣は真っ赤に染まりました。神がそこまでされるのです。

何も罪のない方なのに罪を背負われ、神の怒りのさばきを一身に引き受けていきます。十字架ののちを捨てられます。私たちを救うためにそうされます。

苦しみの中にあるとき、私たちは主を待ち望むことができます。私たちには希望がある。光がある。それを信じなさい。主は今朝語られます。